

古代語に及んだことであつて、第十四世紀に書き初められたクマン即ちポロヴェツィ語を研究して *Codex Comaninus* なる書を著はしたのをはじめとし、次では亞刺比亞字もしくはシリヤ字で書いた古いトルコ語の文記の研究を公にし、遂に突厥語及び回鶻語等に及んだものである。中でも十一世紀の回鶻文のクダツク・ビリクと、突厥碑文との研究には、驚くべき精力を傾注したものである。クダツク・ビリクについては、一八九〇年に先づ維納府に藏せる同書を寫して刊行し、翌年には其草體の字を正體の活字に組み、尙回鶻部族に關する歴史的研究を附して出版し、譯文は音譯と共に一九一〇年に至て公にせられた。尤も一部分の翻譯は早く出來上り印刷にも附せられて居たのであるが、半頃異本が発見されたので校勘に手間どり、且は別に突厥文及び東トルキスタン出土の文獻の研究等の爲に、かく遅延したものである。これによつて以前既に行はれて居つたヴムベリー氏の同書の翻譯が色彩を失ふに至つたことはいふ迄もない。突厥碑文が発見されて間もなく一九一一年に、氏は學士院の命によつて蒙古に旅行したのであつたが、此の際に成つた寫真地圖等は、一八九三年に「蒙古考古圖」となつて現はれた。トムセン氏が突厥文字を読み得るに至つた數月後に（一八九四年三月）、氏は早くも突厥碑文中の闕特勤碑の最初の譯文を公にし、以後續いて出した二篇に於て他のすべての碑文を譯出し、一八九五年には有名なる「蒙古に於ける古代トルコ語の碑文」の名で此等の三篇を一纏めにした、併しながら此の研究は至難の事業の最初の試みで、従がつて誤謬も少くなかつたので、一八九七年には其新篇を刊行して訂正を加ふると共に、古代トルコ語の音韻、形態、文章法等を論じ、一八九九年には第二卷を出して新たに得られた敦欲谷碑文の譯を公にした。次いで東トルキスタンの探檢が行はれて、多く回鶻文の文獻が現はれたので、氏はまたその研究に従事し、精細な譯述を試みたが、就中一九